・書評

『北海道の森林』

北方森林学会 編著、北海道新聞社、2011
A 5 判、319 頁、2,000 円（本体）
ISBN：978-4-89453-622-7

日本の面積の 7 割を占める森林は、もっとも大きな自然として、林業ばかりでなく、多機能性や環境保全の立場からも、その役割が注目されている。特に北海道の森林は日本の森林面積の 1/4 を占める重要な自然である。

この本は北海道の森林の幅広い分野の現状について網羅的にテーマを取り上げ、そのテーマについて最近の内容を含めて解説し、将来の展望を示唆した一般向けの本である。北海道の森林についてその概要を包括的に知りたいというニーズに答えるという待望の本である。またこの本にはこれまで聞いたことのない斬新な話題も多数盛り込まれている。このような本の出版は、北海道の森林についてそれぞれの分野を担う豪華な専門家集団（著者 73 名）のなせる業であると思う。

本の内容は分野別に 9 つの章に分かれている。第一章では、オゾンや CO_2 など大気環境の人為的負荷の影響や、病害虫やシカ食害の問題など森林をとりまく現状と危機を解説している。第二章では、針広混交林、北限のブナやササ林床の機能など北海道の森林の特徴を解説している。第三章では CO_2 固定機能、あるいは貯水、砂防などの防災機能など、直接的な生態系サービスにあたる森林の機能を解説し、第四章では山菜、キノコや暮らしとかかわる木など、森から与えられる恵みを解説している。第五章では森に棲むヒグマなどの哺乳類、鳥類、渓流魚や土壌動物などの動物たちの生態を解説している。第六章では木材生産の場としての人工林と天然林の将来展望や、天然林の治療・再生や種多様性を維持することの意義を解説し、第七章では樹木の品種改良、外生菌根菌による不良土壌への対応、林業の機械化など再生の新技術を解説している。第八章は森・川・海をつなぐ物質循環とそれを大きく変える人間活動による干渉について解説している。終章は東日本大震災後の東北地方の森の再生への取り組みを解説している。

この本の構成と内容をみて、北海道の森林にかかわる分野とそのテーマが膨大であることを改めて実感する。

一点気になることは、現在の環境保全上で重要な課題である森林の生物多様性が独立した章として取り上げられていないことである。天然林の修復や森林動物の生態を含めて種多様性（生物多様性）とその保全のテーマはいくつかの章に出てくるが、生物多様性はひとつの章を構成する大きな課題をもった分野である。この本を読んで、道内の森林の 3 割の面積を占める人工林に、林床草本や動物を含めた生物多様性保全機能を持たせることはできないのかなど、いくつかの問題点を喚起された。北海道の森林の今後の生物多様性保全のための指針となるような内容をひとつの章として盛り込んで欲しかった。

この本はそれぞれの分野の専門家が各テーマを 4 ～ 6 ページという限られた枠のなかで解説している。このためまとまったモノグラフというよりも、テーマごとに解説する事典的な印象を受けた。それぞれ序論としてテーマの概要を解説し何が問題となっているか整理してから、最近の内容を盛り込んだ本論に入り、最後に該当テーマの今後の展望について述べている。文章中にでてくる原生林、人工林や天然生林などの分かりにくい専門用語に対してはそのつど本文中で分かりやすく解説している。おそらくそれぞれ著者は制限された枠の中で、テーマを簡潔に解説するのに苦労したと思う。

このようなトレンディーな概要があれば、そのテーマが置かれている状況がわかるし、必要なら載せられている数個の引用を頼りにして、より専門的な情報に当たることもできる。北海道の森林が抱えている現状と諸問題を知り、今後読者が森林とのかかわり方について考える上のきっかけとなる本である。

なお、「北方森林学会」は、2011年に日本森林学会の法人化に伴い、同学会の「北海道支部」が任意団体に移行し、改称したものである。（矢部和夫）